初期イスラーム時代のキリスト教徒人口の移動

The Christian Migrations in the Early Islamic Times

太田敬子^{*}
OHTA Keiko

ABSTRACT In the early Islamic centuries, in which Muslim governments had continued to have territorial ambitions, we can see not only large quantitative Muslim migrations, but also any number of non-Muslim migrations. This article focalizes on Christian migrations between the seventh and the ninth centuries, because their movements seem to have had relation to change of populations in the Middle East. The more useful sources on this experiment are Middle Eastern Christian documents which give us precious informations neglected by Muslim authors.

Part (1) is composed of a list of records on Christian migrations which have connected with policies and military or administrative purposes of Muslim authorities. All the records are typical in their forms and features.

Then, part (2) examines each form of migrations; captured inhabitants on battles and so on; forced emigrants; forced immigrants; peoples allowed to emigrate; peoples allowed to return to their countries, especially by exchange of captives; people forced to return their countries. And I discussed their features, purposes, and historical backgrounds.

In part (3), I will discuss Christian migrations unrelated to Muslim intentions to compare with the cases in part (1). And part (4) concludes with a analysis of the relations between Muslim rule and Christian migrations, and the influences of these migrations to the Middle Eastern societies.

* 北海道大学文学部助教授
Associate Professor, Hokkaido University

はじめに

(1) 主題と検討方法

西アジア社会のイスラーム化を考察する上でその前提となるのは、ムスリム人口の増加と非ムスリム人口の減少、正確に言えば両者の人口比率の変化である。この人口比率の変化については従来から改宗を中心に論議がなされてきた。しかし非ムスリム人口の変化を改宗問題からのみ論じるのは不十分であり、他の要因——移動・死滅・混血等——も考慮に入れる必要がある。中でも非ムスリムの移動は史料からも多く跡づけられ、ムスリムの支配領域の社会構成に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。そこで本稿では初期イスラーム時代のキリスト教徒の移動を取りあげ、その歴史的展開を辿ると共に形態的特徴や社会的背景について検討を試みる。特に彼等の移動にはムスリム政府の軍事・行政政策が深く関与していたと見られるので、移動におけるムスリム支配の関わりに焦点を当てて検討したい。

具体的検討に際して本稿では以下の点を前提とした。1. 史料としてキリスト教徒文献を中心に検討を進める。⁽²⁾ 2. 時期的にはアッバース朝盛期までとする。⁽³⁾ 3. 兵士の移動・自然災害による移動・短期移動・個人レベルの移動は取りあげない。⁽⁴⁾

史料に現れるキリスト教徒の移動を大別すると、政府の政策や軍事行動に起因する他動的な移動と、自発的な移動とに分けられる。さらに移出・移入双方に他動的要因をもつ場合、片方に他動的要因が関わる場合、双方が自発的な場合とに区分される。本稿の関心はムスリム支配とキリスト教徒の移動の関わりにあるので、他動的要因としてムスリム政府の意向や政策に注目し、それが移出・移入の何れかに関連している事例を中心とし、そうでないものを比較の意味で検討する。

(2) 史料と研究

以下で本稿で用いた主な史料を紹介する。⁽⁵⁾

* *Anonymi auctoris chronicon ad annum christi 1234 pertinens I-II*, ed. I. B. Chabot, tr. (I) I. B. Chabot, (II) A. Abouna, CSCO SS, SER. 3: t. 36, 37, 56, 154, Louvain, 1916, 1920, 1965, 1974, <CHと略>

* *Michael the Syrian, Chronique de Michel le Syrien*, ed. & tr., I. B. Chabot, 4 vols., Paris, 1963. <MSと略>

* *Bar Hebraeus, The Chronography of Bar Hebraeus*, ed. & tr., E. A. W.

Budge, 2vols., Amsterdam, 1976. <BHと略>

*Incerti auctoris Chronicon Pseudo-Dionysianum vulgo dictum I-II, ed. I. B. Chabot, I-II, tr. (Ⅰ)I. B. Chabot, (Ⅱ)R. Hespel, CSCO SS SER. 3 : t. 43, 53, 66, 213, Louvain, 1927, 1949, 1965, 1989. <PDと略>

*Chronicon ad annum domini 846 pertines, ed. E. W. Brook. tr. I. B. Chabot, in Chronica minora II, CSCO, SS SER. 3 : t. 3, 4, Louvain, 1904, 1955. <846と略>

*Chronicon anonymum ad 819 pertinens, ed. & tr. I. B. Chabot, in Chronicon 1234 I, CSCO SS SER. 3 : t. 36, 56, Louvain, 1920, 1965. <819と略>

*“Extract from the Chronicle of Zuqnin (AD 775)”, A. Palmer, The Seventh Century in the West-Syrian Chronicles, Liverpool, 1993, pp. 53-70. <ZQと略>

*Agapius al-Manbijī, Historia Universalis, ed. L. Cheikho, COSO SA, SER. 3 : t. 10, Louvain, 1962. <MNと略>

*al-Balādhuri, Futūh al-Buldān, ed. M. J. de Goeje, Lugduni Batavorum, 1866, rep. Frankfurt, 1992. <BLと略>

*al-Ṭabari, Ta’rikh al-Rusul wa al-Mulk, ed. de Goeje, 15vols., Lugduni Batavorum, 1879-1901. <TBと略>

*al-Mas ‘ūdī, al-Tanbih al-Ashrāf, BGA 8, Leiden, 1968. <TAと略>

ムスリム支配下のキリスト教徒の移動に関する研究はあまり多いとはいえない。Grabar 氏はシリア征服期における単性論派住民のジャジーラへの移住に関して論じているが、氏の主張は考え得るとはいえ論拠が充分とはいえない。また Charanis 氏は東ローマの移住政策の一環として境界領域住民の動向を取り扱っている。イスラーム社会史の面からキリスト教徒の動きを取りあげる意味は大きいと思われるが、本格的な史料分析はまだ行われていない段階である⁽⁶⁾う。

(7)
表1

年代	事 件	形態分類	備 考
636	* アンチオキア地方の Mar Simeon の祝祭を襲撃し、男女多数・無数の少年少女を連行。 (BH, 101) (MS, 417)	連 行	無人化政策 人材獲得
	* アンチオキア付近の住民連行。(BH, 101)(MS, 416) (MN, 345)	連 行	無人化政策
638ca.	* シリア沿岸部住民の強制退去。(BL, 126-7)	退出・退出 許可	無人化政策

640	* カエサレア破壊・住民連行。捕虜4000名をアンサールの孤児に分配し書記や労働者に利用。(BL, 142)	連 行	町の破壊 敵対勢力削減 捕虜の分与
	* Euchaita の全住民連行。町は無人人化。644 年説あり。(CH, 1/259)(BH, 104)(MS, 422)(MN, 345)	連 行	無人化政策
640ca.	* カリフ・ウマルが亡命したキリスト教徒アラブ部族の追放を東ローマ皇帝に要求。イヤード族4000名のみ帰還。(TB, 1/2508)	帰 還	アラブ統制 亡命阻止
645-6	* Amorium 攻撃に際してアンチオキア・タルスース間は無人状態。(BL, 164)	連行・退去	無人化政策
	* アルメニア征服, 住民の強制連行。カッパドキアの Caesarea 地方荒廃。(BH, 104-5)(MS, 428-9)	連 行	無人化政策
648	* キプロス島をシリア及びアレクサンドリア軍が攻撃, 住民を捕獲し, 捕虜と戦利品を2分し両地へ連行し移住させる。(CH, 1/269-70)(BH, 105)(MS, 430)	連行・入植	人材獲得 無人化政策 シリアへ移住
652	* Byzantina と Melitene 地方の征服, 住民10万人の連行。(MN, 348)	連 行	無人化政策
653-4	* キプロス再攻撃, 富裕な住民はローマ領へ逃走, 他の住民を捕獲。講和締結後退去希望者に許可を与え, 残留者に安全保障を認可。他説, 全住民を捕虜。(CH, 1/271-2)(MS, 446)	退 出 許 可	敵対勢力削減
	* コス・クレタ・ロードス島住民の殺害と捕獲。649年説あり。(BH, 98)(MS, 430)(MN, 346)	連 行	敵対勢力削減
654-5	* アラドス島の講和で一部住民がローマ領退去, 一部シリアへ移住, 希望地へ入植。再建防止のため町破壊。(CH, 1/273)	退 去 連行・入植	無人化政策 人材獲得 シリアへ移住
667-8	* シリア全土でキリスト教徒農民の戸籍調査。(MS, 434)	帰 還	人口確保 統制強化
689	* 東ローマとの協定でマルダイテス 12000 名がローマ領移住。一部はアンチオキア・ヒムス地方へ入植。(CH, 1/228, 292)(MS, 445-6)(BH, ⁽⁸⁾ 111)	退去・入植	敵対勢力削減 シリアへ入植

692	* シリア全土で戸籍調査。故郷に帰還し戸籍等の登録を強制。(PD, 2/154)(ZQ, 60)(846, 232)	帰	還	人口確保 統制強化
696-7	* 外国人の戸籍調査, 多数を故郷に強制送還。(CH, 1/294)(MS, 447)(846, 232)	帰	還	人口確保 統制強化
707-8	* Tyana 征服, 住民をシリアへ連行。他説, 4万人の男を殺害, 他の住民を捕獲・殺害。(MN, 356)(CH, 1/298)	連	行	無人化政策 人材獲得 シリアへ連行
	* Nicaea 地方の住民をシリアへ連行。(MN, 356)	連	行	人材獲得 シリアへ連行
	* Jurjūma 陥落。講和協定でマルダイテスは町から退去しシリアの任意の地へ入植。 ⁽⁹⁾ (CH, 1/298)	退去・入植		町の破壊 敵対勢力削減 シリアへ入植
689-70	* スラブ人7000名がシリアへ移住。アンチオキアと Cyrrus 近郊に入植させ, 妻・給与・糧食を供与。(BH, 112)(MS, 446)	帰順・入植		国境警備 人口確保
709-10	* ジャジーラで戸籍調査。他年説あり。(PD, 2/155)(ZQ, 61)(CH, 1/299)(819, 15)(846, 233)	帰	還	人口確保 統制強化
	* Amasia 征服, 住民を連行。Turanda 等の破壊, 住民を連行。(819, 14)(846, 233)	連	行	人材獲得 無人化政策
711	* アルメニア人のローマ領からの追放。メリテネ近郊へ定住。(BH, 114)(CH, 1/299)(MN, 356-7)	帰順・入植		人口確保 国境警備
716-7	* Sardes と Pergamonの住民連行。他説, 男を殺害し女子をアラブ(ママ)領へ連行。(819, 15)(846, 234)	連	行	人材獲得 婦女子の連行
720	* Balāhuniya 征服, 住民2万人連行(MN, 358)	連	行	人材獲得? 無人化政策?
726	* Neocaesarea の破壊, 貴族を連行。他説, 全住民を捕獲し町を引渡したユダヤ人以外を奴隷として売却, ユダヤ人は売却せずに軍と共に出立。(PD, 2/171)(CH, 1/309)(819, 16-7)(84, 235)	連	行	敵対勢力削減 捕虜の売却
727	* Gangres 全域の破壊, 住民は逃走。ニカエア住民の多くを連行。(CH, 1/309)(MN, 359)(MS, 462)	連	行	人材獲得 敵対勢力削減

743	* al-Maṣṣiṣa の郊外居住区にペルシア人・スラ ⁽¹⁰⁾ ブ人・アンバートを入植させる。(BL, 166)	入 植	国境警備と再建
	* キプロス住民の一部が条約違反の理由で連行され, Şūr と Şaydā 間の al-Mahūr の強制移住。翌年帰還許可。(MN, 361)	連行・入植	敵対勢力削減 人材獲得 シリアへ移住
754	* アルメニア人とラーン人の連行。スーリーヤに ⁽¹¹⁾ 入植させる。(MN, 376)(PD, 2/256)(BH, 121)	連行・入植	人材獲得 国境警備と再建
756-7	* 捕虜交換。(TB, 3/125)	帰 還 許 可	
766-7	* Caesarea 征服, 住民を連行し売却。(PD, 2/233-4)	連 行	人材獲得 捕虜の売却
769	* マルアシュ渓谷とサモサテ住民をスパイ容疑で攻撃, ラムラ地方の強制移住させる。(BH, 124)(MS, 476)	連行・入植	敵対勢力削減 シリアへ移住
770	* Laodicaia 征服, 成人男子を除く6000名連行。(TB, 3/371)	連 行	人材獲得 婦女子の連行
771ca.	* マンスールの戸籍調査令。(PD, 2/265)	帰 還	人口確保 統制強化
775	* キリスト教徒捕虜の解放。(MS, 478)(BH, 126)	帰還許可	
779-80	* Samalus ^(補注) 住民の一部をバグダードの al-Sham-māsiya へ移住させる。砦での抵抗者は奴隷として売却。(CH, 2/3)(BL, 170)	連行・移住	捕虜の売却 バグダードへ移住
780	* エフェسس住民の7000名の男子連行。(BH, 128)(MS, 479)	連 行	人材獲得
794-8, 804	* 捕虜交換。 ⁽¹²⁾	帰 還 許 可	
806	* キプロス島破壊。住民16000人を Rāfiqa へ連行し売却。(TB, 3/709)	連 行	人材獲得 捕虜の売却
806, 807	* 捕虜交換。	帰 還 許 可	
830-2	* サマルス住民の連行。他説, 男2万人を殺害, 少年と女を軍のキャンプで売却。(CH, 2/23)	連 行	人材獲得 捕虜の売却 男子殺害 婦女子の連行

831	*コプト人反乱の捕虜3000名をバグダードへ連行、多くは途中で死亡。500名を奴隷として分与しダマスカスで売却。(MS, 527)	連 行	捕虜の売却と分与
838	*アンキラ・アモリウム征服。捕獲した娘1000名を兵士に奴隷として分与。住民の捕虜の一部を官吏とトルコ人奴隷兵に分与し、他は奴隷として家族毎に商人に売却。他說、4000人以上の娘をトルコ人兵に奴隷として分与し、捕虜の数が多すぎるので4000名以上の若者の殺害を命令。(CH, 2/33-4)(MS, 356-8)	連 行	捕虜の分与・売却 女子の捕獲 男子殺害
841, 845-6, 855-6, 859-60, 871-2	*捕虜交換	帰 還 許 可	

I. ムスリム政府の政策に関わる他動的移動

ムスリム政府の政策に関わるキリスト教徒の移動の記録を形態的に分けると、捕虜等としての連行・退去・入植・帰還に分類される。さらに退去・入植・帰還については、移動者の意志に反した強制的なものと許可という形の恩恵付与的なものとに分けられる。ムスリム史料には捕虜連行の記録が毎年のように残されているが、大方は「征服し、破壊し、捕虜を得た」というような常套句表現に過ぎない。それらを全て列挙しても意味がないので、表1では移動者の取り扱いや移動目的に関する情報の含まれているもの、また記録内に何らかの政策的意図が示されている場合を抽出した。

II. ムスリム政府の政策についての検討

(1) 強制連行と強制退去

他動的移動において圧倒的に多い事例は東ローマ領域への遠征によってムスリム領域へ連行された捕虜である。遠征に際しては東ローマ兵士だけでなく現地住民が大量に捕虜として連行されたことは明らかである。捕虜の連行は毎年の様に記録され、その人数や連行先は大抵の場合わからないが、アッバース朝盛期までにムスリム領域へ流入した人口は膨大な数に上ったと考えられる。特に境界領域とそれに隣接する東ローマ領における大規模な住民の連行記録は注目される。一般に捕虜連行は奴隷や使用人等の人的資源の獲得や売却収益、さらに報償としての分与等の経済目的で捉えられるが、東ローマ遠征の場合、

人口削減による在来勢力の抑制、東ローマ軍への協力阻止、ムスリム軍の安全確保といった軍事目的も明白に窺われる。さらにこの政策が徹底した場合、征服地の徹底的破壊や無人化が図られている。このような人口削減政策は、北シリアからキリキア、カッパドキア、地中海諸島、ジャジーラ、アルメニアといった広範な地域で見られる。特に徹底した無人化が図られたのは北シリアからキリキアであり、キリキアの再開発はかなり後になるまで行われなかった。⁽¹³⁾ 従って強制連行に関しては軍事・財政両面から捉える必要があろう。

境界領域の人口削減は住民の強制退去という政策によっても推進されている。大征服期のシリア沿岸部住民の追放令はよく知られているが、⁽¹⁴⁾ 表1のように地中海諸島においても大規模な住民退去の事例が見られる。またアマヌス山脈の山岳勢力であったマルダイテスの退出の場合は東ローマとの協定も関わっているが、彼等の移住を強く求めたムスリム政府の意向も反映している。⁽¹⁵⁾ いずれにせよこれらの住民退去の目的は在来住民の退去によって敵対勢力の排除やムスリムの安全を確保することであり、強制連行による人口削減政策と相通じるものがある。

以上のような大量の連行や退去といった人口削減政策は、ムスリムの支配権の不安定な地域においてしばしば見られ、征服地の拡大に伴い次第に移動していったことが跡づけられる。また支配の安定化と共に強制退去の事例は少なくなっている。

(2) 入植政策

住民の連行や強制退去がムスリム政府の入植政策と結びついている事例がいくつか見られる。入植先や捕虜の連行地を明記した記録は少ないが、表1を見るとウマイヤ朝時代を中心に移入地はシリアが多い。従ってキリスト教徒の移住政策の一環としてかなりの人口が東ローマ領域及び境界領域から政策的にシリアへ移されたと見ることができる。またシリアでの入植地が移住者の任意とされる事例が幾つも見られることは注目に値する。移入者にある程度の居住地選択権が付与された事例から、個人レベルでの用益よりも彼等の集団としての生産力が期待されていたのではないかという推測が浮かび上がる。退去や連行と関連した入植政策は、支配の不安定な地域での在来勢力削減をはかる一方で、ムスリム領域中心部での人的資源（生産または納税人口）の増加を併せ持っていたのではないだろうか。

一方、退去や連行と結びつかない事例もある。この場合入植者は自発的にムスリム政府に帰順した者やムスリム領域へ流入してきた者に限られている。このような集団は主に東ローマ領との境界領域に移入地を指定されている。従ってムスリム政府の目的は彼等を利用した国境地帯の防衛、さらに再開発であったと見なしてよいだろう。しかし境界領域の本格的な再建事業はアッパース朝時代⁽¹⁶⁾になってからのムスリムの大量入植によって実質的には達成されたと考えられる。何れにせよ、シリアへの強制入植や国境地帯への集団入植はウマイヤ朝時代に顕著に見られた現象であり、アッパース朝時代には政策的なキリスト教徒の入植の記録は急速に減少し、捕虜の取り扱いも売却及び兵士への分与が目立ってくる。

(3) 恩恵付与的移動

強制的な移動命令ではなく、退去や帰還の許可という形でもムスリム政府の政策は表されている。シリア沿岸部や地中海諸島等のムスリム支配が不安定な地域で顕著に見られるこの様な政策は、その目的もやはり在来勢力の削減にあったと考えられる。強制的連行や退去に比較して、恩恵付与的な退出許可は一層ムスリムの統制力の低さを示すものと考えられ、ムスリム政府自身もその脆弱さを認識していたことを表していよう。

一方、同様の恩恵付与的な移動政策の一種として捕虜交換が挙げられる。大征服当初から継続して推進されてきた領土拡大政策は、9世紀前半には軍事・財政両面で限界に達していたと見られるが、東ローマ領への大規模な遠征自体はカリフの主導のもとにまだ行われていた。⁽¹⁷⁾従って兵士だけでなく大量の住民が戦争捕虜として捕獲された。しかし彼等は定例化した捕虜交換（主にキリキア西部のラーミス川岸で行われた）⁽¹⁸⁾で順次返還されたのである。捕虜交換は定期的なだけでなく大規模でもあり、キリスト教徒の流入人口に画期的な変化をもたらしたといえる。捕虜交換にはムスリム領域内へのキリスト教徒人口の流入を調節しようという政府の意向が強く見られ、それは境界領域に新たに形成されつつあったムスリム社会の安定を考慮したものと考えられる。一方では早急な捕虜の処分——売却したり軍人等に分与する——が明記されるようになり、また労働力として最も貴重であるはずの成年男子捕虜の殺害記録が見られるようになってくる。この様な現象はムスリム政府またはムスリム社会におけるキリスト教徒捕虜のニーズが全体的に低下した状況を背景としていたのではない

か。捕虜交換は見方によればムスリム領域内のキリスト教徒人口の増加を抑制し、人口の固定化に貢献したといえる。

(4) 強制帰還

ムスリム領域内のキリスト教徒の移動に関係する政策として、生来の居住地への強制帰還が見られる。多くの場合これは戸籍調査に付随して行われている。戸籍調査の主たる目的は政府が直接的に住民を把握することによる統制の強化であるが、それと共に納税人口確保のために住民の本籍地への帰還を義務づけたのである。一方では強制帰還令は農村離脱や流民化が横行していた状況を反映している。戸籍調査と本籍地への帰還命令はウマイヤ朝時代にしばしば出され、同王朝の行政機構の整備や税制改革と密接に結びついているが、生産人口の確保と固定化を目指す政府の意図は明白である。アッバース朝時代初期以降、政府の地方統制がかなり徹底したためであろうかあまり見られなくなる。少なくとも初期イスラーム時代にはムスリム領域内のキリスト教徒農民の移動は厳しくチェックされ、ムスリム農民の人口の増加と共にこの人口固定化政策は彼等⁽¹⁹⁾にも拡大されたといえる。

以上のようにムスリム政府は様々な形でキリスト教徒の移動に関わり、その政策目的も多様であった。しかしその中には様々なムスリム領域内部の状況が反映されていると考えられる。

III. 自発的移動

(1) 移動年表と分類

表2はムスリム政府の意向に関係ないキリスト教徒の移動記録を抽出したものである。これらを形態的に分類すると、ムスリム領域外への亡命、ムスリム領域内外を含めた逃亡や避難、さらにムスリム領域外からの亡命に分けられる。

表2

年代	事 件	形 態	備 考
636	* 東ローマ軍の撤退に伴いシリア・キリキアの住民退去。 ⁽²⁰⁾ (BL, 163-4)	退去・亡命	東ローマの無人化政策に関係
	* ガッサーン族等の移住。 ⁽²¹⁾	亡 命	納税・帰順拒否 アラブの移住

638ca.	* シリア沿岸部住民の退去。(BL, 132, 141)	亡命・逃走	帰順拒否 戦争回避
640-1ca.	* ジャジーラ国境地帯の住民, 東ローマ領へ移 (22) 住。	亡命・逃走	帰順拒否 戦争回避
640ca.	* イヤード族の東ローマ領への亡命。 (23) (TB, 1/2508)	亡 命	納税・帰順拒 否 アラブの移住
645ca.	* アルメニア住民の一部が東ローマ領へ移住。 (BL, 197)	亡命・逃走	帰順拒否 戦争回避
646	* バグダード付近の °Aqūlāye がハッラーンから マンビジュへ, さらに Ḥemath へ移動。 (24) (MS, 429-30)	逃 走	帰順拒否 アラブの移住
653-4	* キプロス住民の富裕者が東ローマ領へ逃走。 (CH, 1/271-2)	逃走・亡命	帰順拒否 戦争回避
678	* マルダイテスがレバノン山脈に侵攻, 山岳部占 拠。逃亡奴隷や土着住民の多数が彼等に合流し, (25) 数千人に及ぶ。	逃走・反乱	帰順拒否 東ローマ軍と の連携
711-3	* シース住民, ローマ軍と共に撤退。 (26)	亡命・逃走	帰順拒否 戦争回避
716-7	* 小アジアからカッパドキア全域, 海からメリテ ネにかけて, アナヌス・レバノン山脈, 内アルメ ニアの Arsenias 川に至るまでの住民がムスリム 遠征軍の到来に先立ち逃走。以降同地方は荒廃し, 再定住者なし。(PD, 2/157)(ZQ, 62-3)	逃 走	戦争回避
720	* 東ローマのユダヤ人迫害により一部がシリアへ 逃走。他説, シリアへ追放された。 (MS, 457)(BH, 118)	亡 命	宗教迫害
726	* コプト反乱の逃亡者が海路で逃走。 (BH, 118-9)(MS, 462)	逃 走	反乱 納税拒否
732ca.	* メリテネ地方のアルメニア人とローマ人多数が 東ローマへ移動。(BH, 121-2)(MS, 465)	亡 命	戦争回避
786	* キリスト教徒への増税に際して住民多数が逃亡 し, 放棄地はアラブの所有になる。(CH, 2/3)	逃 走	納税拒否

808-9	* シース住民が山岳地帯 ⁽²⁶⁾ へ移住。	亡命・逃走	戦争回避
813ca.	* ジャジーラの反乱軍がアレッポ郊外のタヌーフ族を攻撃、彼等は Qinnasrin から Takrit へ移動、一部はアルメニアへ移動。817年説あり。 (BH, 138)	逃走・亡命	戦争回避 アラブの移動
817	* モースルの住民の一部がタクリートへ移動。 (819, 21)	逃 走	?
829	* バーバクの乱の参加者多数が東ローマ領へ亡命。 (CH,2/29-30)(BH, 144)	亡 命	反乱

(2) 自発的移動とその背景

表2に見られるように、征服戦やムスリムの軍事行動に関連してシリアやジャジーラの国境地帯、アルメニア、キプロス及びアラドス島、キリキア地方等の住民から大量の亡命者が出ている。このような亡命現象は旧東ローマ領域全般に見られたようである⁽²⁸⁾。彼等の中には一時的に避難しただけで後に帰還した者もいたと考えられるが、東ローマ領域へのキリスト教徒人口の大きな移動があったということは否定できない。この様な移動が表1でみた連行や退去と共にキリスト教徒人口の減少、極端な場合は無人化を引き起こし、結果として境界領域を中心とした大幅な人口変動に寄与したことは間違いない。従来から亡命者はカルケドン派住民だけであるという見方がなされてきたが、亡命者に宗派の限定があったという明確な証拠はない。

亡命集団が他宗派にも及んでいたことを示す良い例はキリスト教徒のアラブ部族の移動の事例である。カリフ・ウマルへの帰順を拒否してアナトリア中部へ移住したとされるガッサーン族が単性論であったことは有名であり、またジャジーラ征服の後に亡命したイヤード族も単性論派であった。またサワードの部族であったというアクーラーイェーはネストリウス派であったといわれている⁽²⁹⁾。キリスト教徒のアラブ部族の場合は東ローマ領域へ入らなかったものも含めて、ムスリム支配の拡大と共にかなり大幅な移動及び居住・放牧領域の移転を行ったことが跡づけられる。彼等の移動は従属的地位の拒否や納税回避が主因であったことはジャジーラのタグリブ族の事例から分かる。明白なのはムスリム政府がアラブの帰還について東ローマ政府と交渉したり、様々な特例をもうけたりして彼等の亡命を極力阻止しようとしていることである。ムスリム政

府は、定住民と異なり機動性と軍事力を有するアラブ集団については、初期から一貫してムスリム領域外への流出を阻止する政策を採っている。しかし実際にはあまり効果がなかったようである。⁽³⁰⁾

以上のような事例からも、ムスリム支配の不安定な時期や境界領域ではキリスト教徒の国境を越えた自主的移動がかなり頻繁に行われたと考えられる。これらの亡命は当初在来勢力削減という意味からムスリム政府の意向に合致し、強制連行や退去等のムスリム側の政策と結果的に同じ効果を引き起こしたのもあったと思われる。しかし支配権の安定につれて集団亡命は東ローマ軍との関係や納税人口の確保の面から阻止されるようになったと考えられ、ウマイヤ朝後半以降は反乱等の特殊事情の場合以外は見られなくなる。

亡命の他に、戦闘や重税回避のための大規模な居住地離反（逃亡）が記録されている。この場合逃亡者が東ローマ領域へ入ったか否かは不明であるが、この現象も境界領域に顕著に見られる。特に表2の716-7年の事例は大規模な荒廃と人口減少を引き起こし、逃亡が社会的に大きな影響をもたらしたことを示している。⁽³¹⁾ 軍事行動に関わる以外にも増税や統制強化が逃亡の引き金となっている。⁽³²⁾ また786年の事例のように農民逃亡の結果土地保有権が大幅にムスリムに移行したと記録があり、農村社会の構造変化の面からも注目に値する。これらの移出に対して自発的集団移入の事例はごく稀である。

何れにしても亡命・逃亡を含めてムスリム政府の軍事及び財政政策に深い関連をもっていたことは明らかである。自発的な移動も結局はムスリム社会の動向に左右され、自立的な動きではなかったといえる。

IV. キリスト教徒の移動に関する考察

(1) キリスト教徒の移動とムスリム支配

以上、初期イスラーム時代におけるキリスト教徒の移動に関して移動の諸形態とムスリム政府の関与の面から検討してきたが、そこにはやはり歴史的变化が跡づけられる。征服期には東ローマ軍に随伴または自発的にかかなりのキリスト教徒が移出した。ムスリム政府も彼等の流出を阻止するよりも親東ローマ勢力排除の意味から移出を許可したり積極的に追放令を出したといえる。例外はキリスト教徒のアラブ集団であり、機動性と軍事力を有する彼等に関しては基本的に流出を阻止する政策を採ったと見られる。また占領地域内部でも大規模

な人口移動が計られた。支配の不安定な地域——北シリアやジャジーラ、アルメニア、地中海諸島等——においては、ムスリム当局は住民を強制連行するなどしてキリスト教徒人口の削減さらには無人化を計り、在来勢力の削減を企てた。この際連行されたキリスト教徒は主にシリアへ移され、再開発の労働力や生産人口の増加に活用されたと考えられる。この様な移動の結果として境界領域を中心に人口減少と荒廃が広がり、人口の希薄な軍事的緩衝地域が形成されたのである。そこが後にムスリム人口の流入する空間を形成し、境界領域におけるムスリム人口比率の増加、ひいてはムスリム社会の形成を可能にしたと考えられる。このことはキリスト教徒社会の衰退と共に同地方のイスラーム化の要因を考察する上でも重要である。

ムスリム領域へのキリスト教徒人口の流入は、その後定期的侵入戦期にも継続する。その結果人口削減及び無人化政策はアナトリア半島中部にまで拡大された形になった。しかし同領域をムスリムが支配するには至らなかったため、ムスリムの入植はなされず、イスラーム化の進行はトルコ人の征服まで遅れたと考えられる。しかし上記の両領域に共通してムスリム勢力の拡大に伴いキリスト教徒人口は減少し、既存のキリスト教徒社会の衰退へと繋がった。反面、これらの地方から連行された者はムスリム領域内——特にシリア——でキリスト教徒の新来人口を構成したと考えられる。全体として、キリスト教徒人口は征服当初の流出入を経てウマイヤ朝期に流入増に転じ、捕虜交換期になると固定化の傾向を示し始めたと思われる。ウマイヤ朝時代の流入人口はムスリム社会の需要に合致し、彼等はムスリム領域内部で固有の社会的役割を担っていたのではないかと考えられる。

一方、荒廃した境界領域に対してムスリム政府は帰順集団を入植させる政策を採ったが、本格的な再建事業はムスリムの大量入植を待たなければならなかった。それと並行して捕虜交換によるキリスト教徒人口の流入調整も計られるようになる。境界領域がムスリム居住地として固められ、領域外からの人口流入も調整されるようになったことでムスリム領域内部のキリスト教徒人口は固定化されていく方向に向かったということが、できよう。その背景としてはアッバース朝の内部事情も関係していたようだが、大きく見てムスリム領域における外来の人的資源の社会的需要が減少したこともその一因と言えるのではないか。

な人口移動が計られた。支配の不安定な地域——北シリアやジャジーラ、アルメニア、地中海諸島等——においては、ムスリム当局は住民を強制連行するなどしてキリスト教徒人口の削減さらには無人化を計り、在来勢力の削減を企てた。この際連行されたキリスト教徒は主にシリアへ移され、再開発の労働力や生産人口の増加に活用されたと考えられる。この様な移動の結果として境界領域を中心に人口減少と荒廃が広がり、人口の希薄な軍事的緩衝地域が形成されたのである。そこが後にムスリム人口の流入する空間を形成し、境界領域におけるムスリム人口比率の増加、ひいてはムスリム社会の形成を可能にしたと考えられる。このことはキリスト教徒社会の衰退と共に同地方のイスラーム化の要因を考察する上でも重要である。

ムスリム領域へのキリスト教徒人口の流入は、その後定期的侵入戦期にも継続する。その結果人口削減及び無人化政策はアナトリア半島中部にまで拡大された形になった。しかし同領域をムスリムが支配するには至らなかったため、ムスリムの入植はなされず、イスラーム化の進行はトルコ人の征服まで遅れたと考えられる。しかし上記の両領域に共通してムスリム勢力の拡大に伴いキリスト教徒人口は減少し、既存のキリスト教徒社会の衰退へと繋がった。反面、これらの地方から連行された者はムスリム領域内——特にシリア——でキリスト教徒の新来人口を構成したと考えられる。全体として、キリスト教徒人口は征服当初の流出入を経てウマイヤ朝期に流入増に転じ、捕虜交換期になると固定化の傾向を示し始めたと思われる。ウマイヤ朝時代の流入人口はムスリム社会の需要に合致し、彼等はムスリム領域内部で固有の社会的役割を担っていたのではないかと考えられる。

一方、荒廃した境界領域に対してムスリム政府は帰順集団を入植させる政策を採ったが、本格的な再建事業はムスリムの大量入植を待たなければならなかった。それと並行して捕虜交換によるキリスト教徒人口の流入調整も計られるようになる。境界領域がムスリム居住地として固められ、領域外からの人口流入も調整されるようになったことでムスリム領域内部のキリスト教徒人口は固定化されていく方向に向かったということが、できよう。その背景としてはアッバース朝の内部事情も関係していたようだが、大きく見てムスリム領域における外来の人的資源の社会的需要が減少したこともその一因と言えるのではないか。

注

- (1) al-Balādhuri, *Futūh al-Buldān* (後述) 等にしばしば見られる。
- (2) 記録は全体的に少ないが、キリスト教徒史料の方が詳しい状況を伝えている。
- (3) al-Ma'mūn (813-833) までは領土拡大が国家政策として実質的に継続されていたといえる。遠征目的には変化があるとしても征服戦と領土拡大が国家存立の基本として位置づけられ、財政的にも重要な意味を有していたといえる。その後拡大政策は方向修正され、9世紀後半には政策変更が明らかになる。
- (4) 本稿で用いる住民は兵士以外のものを意味する。
- (5) 史料表の中で最初の3文献は後代のものだが、Dionysius Tell Maḥrē (単性論派のバトリアキ818-45) の現存しない史書の引用・要約を伝えるものとして信頼性が高い。
- (6) O. Grabar, 'Note on the Population of the Jazirah in the Early Islamic Times', *AMERICAN ORIENTAL SOCIETY MIDDLE EAST BRANCH SEMI-CENTENNIAL VOLUME*, ed. D. Sinor, Indiana Univ. 1969, 89-98, P. Charanis, 'The Transfer of Population as a Policy in the Byzantine Empire', *COMPARATIVE STUDIES IN SOCIETY AND HISTORY* 3, 1960-1, 140-54. またアルメニア人に関してはアルメニア史の面からいくつかの研究が見られる。
- (7) 戸籍調査は殆どの場合流民や逃亡農民の強制帰還を伴うので、表に挿入した。以下表1, 2, 注の地名に関しては附地図参照。アラドス島はアンタルトゥース対岸の島と言われる。Byzantina と Balāḥuniya は確認できなかった。
- (8) マルダイテスはアラビア語では Jarājima。アマヌス山脈にイスラーム以前から勢力を持っていた山岳住民と言われる。拙稿「アラブ勢力の拡大と北シリア山岳住民」『東洋学報』73/1, 2, 27-54 及び表2の678年の記録参照。
- (9) ジュルジューマはマルダイテスの本拠地の町。
- (10) この場合アンバートはシリアの土着キリスト教徒を指すと思われる。マッシーサ及びキリキヤ再建については、BL, 163-71 及び拙稿「スグル・シャーミーヤ再建史考」『オリエント』36/1, 1993, 18-37参照。
- (11) スーリーヤは旧ローマ行政区分での北シリア地方。この年、東ローマ軍がメリテネ地方を攻撃し, Ṣāliḥ b. ʿAlī の率いるムスリム軍が反撃に出た。この際かつて東ローマがカトリコス Kūshān と共にアルメニアから同地方へ移住させていた彼等を連行した。
- (12) 以下、捕虜交換については TA, 189-96 に詳しい。
- (13) シリア・ジャジーラの境界領域に関する情報はBLの他, Ibn Shaddād, al-ʿAḡlāq al-Khaṭīra fi Dhikr Umarā' al-Shām wa al-Jazīra, 1/2, ed. A. M. Edde, *BULLETIN D'ETUDES ORIENTALE*, t. 32-3, 265-402, 3/1, Damascus, 1978, Ibn al-ʿAdim, *Bughya al-Ṭalab fi Ta'rikh Ḥalab*, 1. Frankfurt, 1986参照。
- (14) BL, 126-7.

- (15) 協定内容はムスリム側の大幅な譲歩を示し、マルダイテスの撤退の代償としてウマイヤ朝が毎日 1000 nomisma・馬 1 頭・奴隷 1 人を提供、キプロス・アルメニア・イベリアの税収の折半等が規定されたという。注(8)参照。
- (16) 再建事業に関しては拙稿「スグール再建史考」参照。シリア境界領域のムスリム社会に関しては C. E. Bosworth, 'The City of Tarsus and the Arab-Byzantine Frontiers in Early and Middle 'Abbasid Times', *ORIENS* 33, 1992, 5-31, 谷口淳一「アッバース朝シリア辺境におけるダール」『オリエント』38/1, 1995, 156-70 参照。
- (17) P. von Sivers, 'Tax and Trade in the 'Abbasid Thughur 750-923/133-351', *JESHO* 25/1, 1982, 71-99, 及び拙稿「スグール再建史考」参照。
- (18) ラーミス川はキリキア征圧後東ローマとの国境となった。TA, 189-96, Ibn Shaddād, op. cit., 1/2 巻 (ジュンド・キンナスリーン) 参照。
- (19) 戸籍調査及び測量・徴税のやり方についての詳しい情報は, PD, 2/252-331 におけるマンスール時代のジャジール総督 Mūsā b. Muṣ'ab の事例を参照。
- (20) ヘラクリウス帝はシリアからの撤退に際して同地域の住民を連行して無人化し、アマヌス・タウルス山脈を防衛ラインとする緩衝地帯を設けた。
- (21) Jabala b. al-Ayham に率いられて東ローマ軍に参加していたガッサーン族とそれに従っていた部族はウマルへの帰順を拒否してアナトリア半島中部へ移住した。彼等の亡命の原因はジズヤの支払い拒否であったという。ガッサーン族に関しては EI² 2/1021 参照。
- (22) BL, 172-92 参照。
- (23) イヤード族はイラク及びジャジールに居住のキリスト教徒部族。ムスリム軍の侵攻によってジャジール諸部族も移動したが、同部族は多数が亡命したことが明らかである。これが表 1 640 ca. の原因となる。キリスト教徒アラブの分布に関しては J. S. Trimingham, *Christianity among the Arabs in Pre-Islamic Times*, London-Beirut, 1979 参照。移動については拙稿「初期イスラーム時代のキリスト教徒アラブ社会」『東洋史研究』55 巻 1 号, 144-181 参照。
- (24) ラフム朝傘下のイバード族と見られる。ibid. 171-3. Ḥemath はヒムスのことか？
- (25) 上記注(8)(15)参照。
- (26) シース住民の動向に関しては BL, 170, Ibn Shaddād, op. cit., 1/2, 366, Ibn al-ʿAdim, op. cit., 1/247-8, 拙稿「スグール再建史考」参照。
- (27) マームーン時代に反乱を起こしたウカイル族の Naṣr b. Shabath の軍隊。詳細は BH, 124, CH, 2/9-13, 21, MS, 449。
- (28) エジプトや北アフリカでも同様の現象が見られた。
- (29) キリスト教のイラク方面のアラブへの普及は 5-6 世紀に始まる。ヒーラのラフム朝ではネストリウス派が広まったが、6 世紀半タクリート主教 Aḥudemmeh の活

動によりシリア・ジャジラ・イラク全般に単性論派を奉じる部族が多く分布するようになった。

- (30) タグリブ族に関しては TB, 1/2482, 2509-11, BL, 181-3 その他税に関する諸文献に詳しい。タグリブ族は2倍のサダカで有名であるが、この特別待遇はイヤード族等の亡命に起因し、タグリブ族の亡命阻止のために規定されたという。拙稿「初期イスラーム時代」参照。
- (31) それまでの地域は人口の多い居住区で、葡萄・穀物他あらゆる種類の樹木が豊富に植えられていたという。
- (32) 農民逃亡や抗租運動に関するエジプトの事例については、森本公誠『初期イスラーム時代エジプト税制史の研究』岩波書店、昭和50年を参照。
- (33) この地域の地誌は Ibn Ḥawqal, Šūra al-Arḍ, BAG 2, Leiden, 1967, E. Honigmann, Die Ostgrenze des byzantinischen Reiches 363-1071, Bruxelles, 1935参照。
- (34) Maximus the Confessor (d. 662), カルケドン派神学者。ヘラクリウス帝の宗教政策に反対し、独自の神学及び教会観を主張、ビザンツの哲学者と言われる。The Oxford Dictionary of Byzantium, Oxford, 1991, 1323-4.
- (35) MS, 457-9, 468 参照。
- (補注) サマルスはマッシーサ及びタルスス近くの町。

関連地図